

地質標本館—現状と展望

神谷雅晴¹⁾

地質標本館は地質調査所が筑波移転を契機として建設され、1980年(昭和55年)に開館した比較的新しい自然科学系の博物館であります。

その目的は、地質調査所が設立されて以来、108年の長きにわたって調査研究してきた多くの成果を、より多くの人々に理解していただくことであり、視聴覚メディアを駆使して紹介、展示して参っております。現在、地質標本館には2,000点以上の岩石、鉱物、化石などの標本や数多くの地質模型やパネルなどが展示されていますがそのほかに、30万点にのぼる国内、海外の標本試料を収蔵し、それらの整理、分類、集中管理、体系化などの研究業務を精力的に行っています。さらに、岩石鉱物試料の薄片作成、機器試作などの研究支援業務も含まれています。

このように、地質標本館はわが国唯一の地球科学に関する総合的な博物館として一般に公開し、社会に貢献することを念願としています。

地質標本館の開館以来の入館者数は9年目にして30万人を超え、平成2年の開館10周年記念週間には33万人に達するものと推定されます。

さて、ここでわが国における博物館の推移について眺めてみると、1930-40年で300前後であったが、戦中戦後の混乱期を経て徐々に増加し、1970年代には1,000を超え、最近の10年間はいわゆる博物館ブームとも言われるほどの増加ぶりを示し、広い意味での博物館の総数は4,000以上になるものと推定されています(丹青社, 1986)。さらに、ごく最近の数年間には200館に近い博物館が建設されています。このうち、自然科学系の博物館は約130で、博物館総数の3%を占めているに過ぎません。この比率は世界の先進各国に比べてそれほど劣るとは考えられませんが(糸魚川, 1982)、問題は博物館の質ということになります。

博物館は歴史、美術、考古、自然史など多くの分野区分以外に、極めて地域性の強い郷土史博物館、あるいは企業博物館を含めた私的博物館など非常にバラエティーに富んでいます。その中で、地質標本館のような地質を

中心とした博物館は極めて異色なものといえるでしょう。同様な分野の博物館としては鉱業博物館(秋田大学)、地下資源館(豊橋市立)などがあるものの、地球科学に関する総合的なものとしてはこの地質標本館が唯一といえるでしょう。地質標本館の設立以来の入館者は小、中等学校の児童、生徒が主体であり、入館者全体の40%を占めています。勿論大学などの地球科学関連の学生や研究者も訪れますが、その数は僅かです。このことから、地質標本館が単に一般の社会人を対象とするだけでなく、地球科学に関連する知識や現象についての啓蒙や教育に深く関わっている事は明らかであります。

現在の地質標本館は常設展示を主として、年間270日公開しており、1日平均の入館者数は120-140名ですが第2、第4土曜日を休館としたため、昨年あたりから漸減の傾向が見られます。

研究成果の一般公開を通じての社会への貢献を目的としている地質標本館は近年の地質調査所における広範な研究活動に即応して、その展示、普及をはかることを常に心がけています。

地質調査所の研究活動は

- 1) 国土およびその周辺地域の地球科学的実態の解明
- 2) エネルギー・鉱物資源の探査と評価
- 3) 国土およびその周辺海域の環境保全、自然災害の予知・防止
- 4) 国際研究協力および技術協力

に集約されます。このことから、地質標本館における常設展示は 1)地球の歴史、2)生活と鉱物資源、3)生活と地質現象および 4)岩石、鉱物、化石にまとめられています。さらに、つぎつぎと新しく得られる標本試料と地球科学データに基づく解説展示や映像展示などにも努力して参っております。

これらの展示によって、わたしたちがどのような地質的環境に位置し、それらを利用すると同時に、どのような影響を受けているのかなどについて十分な理解をはかることが必要かと考えています。

わが国の地質的な特徴は、日本列島がユーラシア大陸

1) 地質調査所 地質標本館長

東縁の島弧に位置していることにあります。特に、新第三紀中新世以降におけるわが国の地質によく反映されています。すなわち、現在の日本列島は「大陸・島弧・縁海」というダイナミクスによって支配されているといえます。このような地質的發展史は、単に地質史にとどまらず、日本列島の現状の理解に加えて、未来予測をも可能にするものであります。

地質それ自体は属地性の強いものでありますが、ローカルな地質の理解にとどまらず、広域のあるいはグローバルな地質を理解することによって、わたしたちが置かれている地質的環境をより深く知ることができるのです。例えば、ある地域の火山活動は海洋プレートの沈み込みに伴うマグマの発生およびその付近の地殻の性質や状態などと密接に関連したものであり、マグマの性質や噴火の状態はマグマが地殻とどう反応したかによって異なります。このような現象の理解には、火山そのものを対象とするだけにとどまらず、より広域的な地球科学的研究を総合化することによってはじめて可能となるのです。同時にこの火山活動がわたしたちの生活にどう結びついているのかを知ることでもできるのです。火山活動に伴う地震や火山噴出物による災害は人々に大きな恐怖を与えていますが、一方で、火山作用は温泉、地熱利用だけでなく岩石あるいは鉱物資源の利用によって、私たちの生活に大いに貢献している側面もあることを評価する必要があります。

このように、地質現象をグローバルな観点から総合的に捉らえるとともに、人々の生活との関連性を多角的に評価することがわたしたち地球科学者に求められていることを強く自覚し、同時に、その結果を広く社会へ普及しなければなりません。わたしたちの研究成果はともすれば、地球科学関連の研究者に理解されることに重点を置きがちであるが、今後はいかにして社会への還元をはかるかについても努力すべきであります。その最も効果的な手段の一つとして地質標本館における視聴覚メデ

ィアを通しての活動が位置づけられます。

地質標本館が社会に必要な地球科学に関する知識や情報伝達のメディアとして評価を受け、さらにその存在価値を高めるためには、いわゆる「博物館」としてではなく、価値のある新しい情報を伝達する「博情館」（梅棹1986）へと脱皮する必要があります。すなわち、地球科学情報の伝達や標本の展示にとどまらず、新しい情報を、進んだエレクトロニクス技術を利用して、いろいろなレベルからの知的欲求に応える努力が必要となります。

わが国が東アジアに位置し、ユーラシアプレートと太平洋プレートとの境界域に生じた島弧であることから、大陸—島弧—縁海に関する地球科学情報は他の国々に比較して豊富であるだけでなく、より新しい情報を得る事が可能であると言えます。これは地質調査所の重要な研究テーマの一つとしてとりあげられており、国際的にも貢献度の大きいものであります。将来における地質標本館の主要なテーマとして積極的に取組み、国内の人々の欲求に応えるだけでなく、地質標本館業務の一貫として国際協力を推進し、大陸—島弧—縁海に関する代表的な地質標本館としての地歩を築きたいものです。

文 献

- 地質調査所 (1989) 昭和63年度地質調査所年報, 225p.
 糸魚川淳二 (1979) 博物館だより, 共立出版, 220p.
 — (1986) 博物館を考える, 公立出版, 194p.
 丹青社 (1986) 博物館情報検索事典, 丹青社総合研究所, 544p.
 梅棹 忠夫 (1987) メディアとしての博物館, 平凡社, 269p.

KAMITANI Masaharu (1990): Geological Museum — present and future.

<受付: 1990年5月8日>